

Ⅱ-3 「丹後王国」の系譜 —湯舟坂2号墳の被葬者像をめぐって—

本庄 総子

1. 湯舟坂2号墳の被葬者像

湯舟坂2号墳に関しては、文献史学の分野でも、いくつかの被葬者像が提示されている。まず、清水みき氏は当該古墳出土の双龍環頭大刀を手懸かりとして、被葬者と蘇我氏の関連性を指摘した(清水1983)。この蘇我氏関係者説は、『日本書紀』欽明23年8月条にみえる「金飾刀」が環頭大刀であるとみられること、そしてその「金飾刀」が蘇我稲目に送られていることを根拠とする。この推論は蘇我氏が環頭大刀の入手ルートを有していたことの証明であって、環頭大刀が出土した古墳全般と蘇我氏との関係性まで保証するものではなかったが、考古学の分野では双龍環頭大刀の生産・流通に蘇我氏が関わっていたとして清水説を補強する見解も提出され(豊島2022など)、一般化が図られている。

清水氏が自説の傍証として挙げているのが、敏達天皇6年(577)の私部の設定(『日本書紀』)である。その前年に額田部皇女(のちの推古天皇)が敏達皇后となったことが設定のきっかけらしい。額田部皇女はいわゆる蘇我系皇族であり、私部設定の背景には蘇我氏の強力な後押しが想定されている(角林1989)。詳しくは後述するが、私部は湯舟坂2号墳の所在地である丹後国熊野郡域にも設定されていたことが明らかであるから、湯舟坂2号墳の周辺にも蘇我氏の勢力が及んでいたであろう、との推定が可能となっている。

熊野郡に限らず、丹後・丹波両地域には私部を初めとする多くの部民が設定されていた(磯野1987)。それは、両地域に王権の影響力が強くはたらいていたことを証する事実として評価されている。こうした地勢から、湯舟坂2号墳の被葬者について、部民を管掌する伴造層であろうとの説も提示されている(吉川1999)。

湯舟坂2号墳の周辺で活動した有力氏族としては、海部直氏が挙げ得るのみである。海部直氏は、海人を率いて神功皇后の新羅征伐に奉仕したとの伝承をのちに形成している(『海部氏勘注系図』)ほか、応神天皇の時に国造に任じられたとの古伝(『海部氏系図』)も有しており、また丹波国造と同族との伝もある(櫛木2007)。伴造というより国造としてのアイデンティティが強い。彼らの墓域にしても、熊野郡川上郷域の沿岸部に築かれたとの伝えこそあるが(『海部氏勘注系図』)、湯舟坂2号墳のようにやや内陸に入り込んだ地域まで彼らの墓域であったとみなし得るのか、やや不安である。かといって、湯舟坂2号墳の築造当時、海部直氏以外の有力氏族の存在は知られてはいない。

一方、湯舟坂2号墳の周辺が「王家の谷」の異名をもつように、いわゆる「丹後王国」との関係性を想定する意見も流布している。「丹後王国」論とは、ヤマトの王権から相対的に独立した政体が丹後地域に存在したと想定するもので、門脇禎二氏によって提唱され(門脇1986(初出1983))、以来地域振興と結びつきながら定着している。『古事記』や『日本書紀』(以下

「記紀」という)には、ヒコイマスやミチノウシといった丹後ゆかりの「王」たちの伝説が残されている。ただし門脇説によれば、丹後王国の存続期は4世紀末から6世紀中葉である。湯舟坂2号墳は6世紀末頃に築かれて7世紀初めまで追葬を繰り返したとみられる墳墓であるから、「丹後王国」とは全く年代が合わない。この点は留意が必要である。

以上、湯舟坂2号墳の被葬者をめぐっては、蘇我氏の関係者、伴造氏族、ヒコイマス・ミチノウシ親子を中核とする「丹後王国」、といった要素が想定されているものの、各要素の内実に踏み込んだ議論には至っておらず、またその三要素が相互にどう関係するのか(あるいは関係しないのか)といった点も不明のままであるといえよう。

2. 「丹後王国」の系譜

まずは「丹後王国」について整理しよう。「丹後王国」といっても、丹後という地名自体は和銅6年(713)に生まれた比較的新しい地名で、古くは丹波＝タニワと呼ばれる地域の一部であった。「丹後王国」とは、古きタニワに栄えた地域勢力のことを指している。

門脇氏は「丹後王国」をはじめとする「地域王国」が各地に存在したと想定しているが、地域王国の成立要件として重視されたのが、当該地域王国における男系王統の成立であった。タニワの場合、ヒコイマス・ミチノウシという親子を中心とする3代ないし5代の系譜が想定されている。

記紀によると、第9代天皇開化にはヒコイマスとヒコユムスミという名の2人の皇子がおり、前者の母は和邇氏、後者の母は「旦波之大県主」ユゴリの娘タカノヒメ(竹野比売)であるという。ただしヒコイマス・ヒコユムスミ兄弟の伝承には親世代、子世代、さらに孫世代にまで混乱がみられ、たとえばミチノウシには、ヒコユムスミの息子であるという異伝もある(『日本書紀』垂仁5年10月己卯条)。こうした事実から、この兄弟は同一主体と推定され、ヒコイマスの母親が和邇氏であるというのは後世の伝で、本来の所伝ではタニワ出身のタカノヒメが母だったのだろうとみられている(告井2007)。

またヒコイマスは『古事記』、ミチノウシは『日本書紀』に、崇神天皇の命でタニワ平定のため派遣されたという伝承をもつ。特にミチノウシは「タニワヒコ」の称をもっており、「○○ヒコ」という称は一般的に○○の地に本拠を置く有力者に冠せられる呼称であるから、ミチノウシはタニワに土着し、一定の勢力を築いていた存在として描写されていることになる。

ミチノウシには複数の子女がおり、そのうちの一人であるヒバスヒメは「丹波之河上之摩須郎女」を母にもつ。「河上」という地名はのちに「丹後国熊野郡川上郷」(『和名類聚抄』)として編成された地域を指すものであろう。現在の川上谷川に沿って広がる平地部に比定される。湯舟坂2号墳もまた、川上の地の縁辺に位置している。

記紀によると、川上から巣立ったヒバスヒメは、のちに第12代天皇景行として知られる倭王を産んだと伝えられる。ヒバスヒメは、仮に実在するなら4世紀の人物ということになるが、彼女と同時代のタニワ有力者は巨大な古墳を次々と築いた。その巨大さは、同時代の列島全体を見渡しても屈指のものである(下垣2023:表3-2)。タニワにおける巨大古墳の築造は、ヒバスヒメが王母となったことによるものであるとの評価もある(吉川1999)。

以上、記紀には、ユゴリ、タカノヒメ、ヒコイマス(ヒコユムスミ)、ミチノウシ、ヒバスヒ

メ、という5代にわたってタニワゆかりの人物の系譜が伝えられている。その系譜は、門脇氏が想定したような独立的な男系の系譜とは言い難く、むしろタニワとヤマトの強固な結びつきを主張するものであった。

では、4世紀のタニワに築かれた覇権はその後、どうなっていくのだろうか。5世紀になると、この地域の古墳は急速に小規模化していく。ヒコイマス・ミチノウシの子孫に関する所伝も消えていく。ミチノウシの男子として唯一名が知られるミカドワケは、「三川の穂別」の祖となったと伝えられているが、この氏族は三河国宝飫郡、現在の愛知県東部にあたる地域に盤踞した氏族であるから、タニワとは本拠を異にしていた。「丹後王国」はタニワの歴史から姿を消していくのである。

3. 海部直氏と国造

代わってタニワで勢力を広げていったと伝えられるのは、のちに「丹波国造」と呼ばれる一族である。丹波国造の一派とされる海部直氏には『海部氏系図』が残されているが、その系譜にヒコイマス・ミチノウシは現れない。海部氏系図において、祖として強烈に意識されていたのは健振熊という人物である（鈴木2017）。健振熊は、記紀では神功皇后のもとで忍熊王討伐に当たった武将としてその事績が伝えられている。

ヒコイマスについては後世、母方をとおして和邇氏との関係が假冒されており（告井2007）、また海部直氏についても和邇氏との関係が系譜に架上される（鈴木2017）ため、ヒコイマスの系譜と海部直氏の系譜は和邇氏をとおして傍系で繋がっているようにも現状みえるが、その祖先系譜は交わってはいないのである。

丹波国造の出自認識においても、ヒコイマスとの系譜的連続性は想定されていない。これは丹後の西隣を勢力圏とする但遅麻国造やさらに西隣の稲葉国造がヒコイマスの子孫を主張している（『先代旧事本紀』国造本紀）のとは対照的である。特に但遅麻国造の場合は「竹野君同祖」とされており、竹野とは丹後国の東北部を占める郡の名である。上述のとおり、ヒコイマスの母に比定される女性の名も「竹野比売」であった。さらにヒコイマス・ミチノウシは記紀によればタニワ平定に赴いた將軍で、特にミチノウシは「タニワヒコ」の称までもっていたのだから、丹後・丹波こそ本拠であったと見なし得る。ところが、後世の国造の祖先系譜としては、丹後・丹波は「ヒコイマスの子孫」の空白地帯であり、そこに丹波国造が盤踞しているという状況であった。

丹後国造の一派とされる海部直氏は、前述のとおり、自らの台頭のきっかけとして応神天皇からの国造任命を主張していた。「国造任命」の実態は不明であるが、海部直氏の認識によれば、彼らの台頭時期は、丹後の巨大古墳に象徴される「丹後王国」が後退していく時期と一致している。

以上の事実から海部直氏は、ヒコイマス・ミチノウシ親子の事績として伝えられる「丹後王国」の勢力後退後、これと交代するように勃興した一派であるとみることが可能であろう。

4. 私部の設定

海部直氏の勢力は5～6世紀をとおして定着していったようであるが、こうした状況にあった丹後地域に私部が設定されたのは敏達天皇6年(577)のことである。私部とは、后妃という地位の制度的確立に対応して設定されたもので、それまで個々の后妃のために設定されていた部民とは制度としての段階を異にする新しい部民である(岸1966(初出1957))。

私部の分布は全国に広がっている(岸1966、土田2003)が、湯舟坂2号墳の位置する丹後国熊野郡にも私部は設定されていた。天平勝宝元年(749)12月19日付け丹後国司解(『大日本古文書3』344頁)に登場する大私部広国が有名である。彼は丹後国熊野郡を本貫としていた。当時、東大寺に施入するための奴婢を諸国から集めるよう指示が出されていたのだが、丹後国では条件に合う奴婢の確保が難航し、5人の奴婢を集めなければならないはずが結局4人しか集められなかった。その貴重な4人のうちの1人を貢上したのが大私部広国だったのである。

さらに、藤原宮跡出土の「熊野評私里」木簡(『評制下荷札木簡集成』159号)と平城宮跡出土の「丹後国熊野郡私部郷」木簡(『木簡研究10』91頁)の存在により、熊野郡に私部郷(里)が置かれていたことも判明した。私部郷は、丹波国何鹿郡、因幡国八上郡、肥後国飽田郡、そして丹後国熊野郡の4例のみ存在が確認できる。熊野郡における私部設定は全国的にみてもかなり大規模に実施されたものらしい。

私部郷4例のうち、丹後国熊野郡の私部郷だけは早くに消滅してしまった(10世紀成立の『和名類聚抄』に所見なし)ため、その所在地については謎が多い。ただ、熊野郡の延喜式内社である聞部神社は関係があるのではないかとみられている(京丹後市史編さん委員会2012)。

聞部神社は現在では聴部神社と表記され、「キクベ」神社と読まれているが、古代における〇〇部がみな連用形接続(鞍作部はクラツクルベではなくクラツクリベ、犬養部はイヌカウベではなくイヌカイベ)であることを考慮すれば、本来は「キキベ」と読んだのだろう。『延喜式』の古訓も同様である。聞部(キキベ)と私部(キサキベ)との間には、確かに音の類似性が認められる⁽¹⁾。

聞部神社から約3kmの距離、同じく熊野郡内に所在するのが湯舟坂2号墳である。同古墳と現在の聞部神社は川上谷川沿いに形成された谷地形で結ばれている。また聞部神社の社前と「王家の谷」開口部とを結ぶ現・町分久美浜線は、山間を縫って但馬方面へと抜ける主要道でもある。しかも、私部の設定時期と、湯舟坂2号墳を初めとする「王家の谷」形成時期はよく一致している。湯舟坂2号墳の被葬者として、私部の管掌者は候補となり得る。

一つ問題なのは、私部を管掌する伴造クラスとみられる氏族が見当たらない点である。「私部首」(備中国大税負死亡人帳)や「大私造」(『出雲国風土記』)のようなカバネが丹後国熊野郡の私部に賜与されていた形跡は確認できない。熊野郡の私部は前述のとおり「大私部」を名乗っており、この「大」がつく部民は有力な部民であるという意見もあるが、因幡国高庭庄の大私弘道が私部弘道と表記されることもあるように混同も生じ得たから、「大」がつく私部の優位性はあまり絶対視できない。8世紀の段階における大私部は奴婢の所有から一定の富裕さを想定することこそ可能だが、果たして湯舟坂2号墳クラスの墳墓を築き得る程の力をもっていたのだろうか。

注目されるのは、大私部はヒコイマスの子孫であるという系譜認識が遅くとも9世紀段階で生じていた事実である。弘仁6年(815)成立の『新撰姓氏録』(左京皇別)において、大私部は「彦坐命の後」、つまりヒコイマスの子孫を称している。『新撰姓氏録』は京畿の氏族名鑑で、その中にはヒコイマスの子孫を名乗る氏族が少なからず記載されているが、多くは日下部連とその支族であって、ミチノウシではなく、その兄弟とされるサホヒコを祖とする一族である。氏族名から推定される本拠地も大和、山城、近江が殆どで、タニワとの関係性は稀薄なのだが、そうした中でタニワとの繋がりを想定可能な貴重な一例が大私部なのである。

5. 「丹後王国」と大私部

大私部の分布は日本海側を中心とした各国に広がるが、ヒコイマスに連なる系譜認識が生じ得る背景として、丹後国熊野郡に設定されていた大私部の存在は無視出来ない。丹後国熊野郡は「ヒバスヒメの故郷」川上郷の所在地でもある。前述のとおり、国造の系譜認識において、ヒコイマスの子孫の分布域は丹後・丹波に不自然な空白が生じていたが、この空白を補うように、大私部はヒコイマスの子孫という系譜認識をもっていた。

大私部と海部直氏とは、同じ丹後国熊野郡にありながら、対照的な系譜認識を形成していった。この両者の関係を、私部が設定された当時に遡って推定するなら、それは競合関係であったとみるのが最も理解しやすい。

私部の設定は、地域における既存のパワーバランスにどのような影響を与えたのだろうか。この問題を解く上で参考になるのが壬生部の事例である。壬生部とは、私部と同じく、従来の部民とは制度的段階を異にする新しい部民であり、推古天皇15年(607)に設定されたという(『日本書紀』)。私部の設定から30年後のことである。

私部が后妃のための部民とされているのに対し、壬生部は上宮王家との関わりが史料上は顕著である。そして壬生部には、私部と同じく蘇我氏の関与が認められる。上宮王家は、もともと蘇我の血を色濃く受け継ぐ王家であった。また蘇我蝦夷・入鹿の墓所造営に上宮王家の乳部(=壬生部)が動員されたために、上宮大娘姫王が憤り嘆いたという(『日本書紀』皇極元年是歳条)。蘇我氏の「越権」を主張するための記事であるが、上宮王家と蘇我氏の密接不可分性とそれ故の軋轢を伝える記事とみるべきであろう。私部と壬生部は、蘇我氏の強力な後押しを受けつつ、蘇我氏と強固に結びついた王家のために設定されたものと評価できる。また部民である以上、その背後には一氏族・一王家を超えた王権への奉仕体系が存在している。

壬生部は東国に集中的に設定されたが、これが設定された地域に多大なるインパクトを与えた。のちに下総国埴生郡として編成される地域には7世紀の竜角寺古墳群が広がるが、その被葬者としては大生部直氏おおみぶべに比定するのが現在の有力説である(川尻2003(初出2001))。この説によると、埴生の地の大生部直は7世紀に急速に勢力を伸ばして国造の地位を獲得し、さらに埴生郡(評)の新設を許可されたとみられている。壬生連氏と壬生直氏によって建てられた常陸国行方郡(『常陸国風土記』)についても、壬生の勢力拡大が建郡(評)の背景として想定されている。壬生部の設定は、既存の国造秩序を大いに揺るがし得る一大事件だったといえる。

こうした事態は私部の場合にも起こり得たのではないか。つまり、丹後国熊野郡の地に設定された大私部もまた、設定当時にあっては海部直氏の地位を脅かし得た。ヒコイマスを祖とす

る大私部の系譜認識は、私部設定以前から存在した既存のものかもしれないが、丹波国造との対抗関係の中で新たに作り出された公算も高い。いずれにせよ、「丹後王国」の記憶は6世紀に現出した地域の競合関係の中で「復活」し、当該地域のパワーバランスに作用していたのである。

ただし、私部郷の地名が熊野郡から早々に消滅すること、伴造クラスのカバネをもつ大私部が確認できないこと、以上を踏まえると、その後の大私部が辿った運命は明るいものではなかったようである。カバネの秩序は天智天皇9年(670)の庚午年籍により基礎が確定するが、この時までには大私部は既存の国造勢力すなわち海部直氏に圧倒されてしまっていたのだろう。丹後はヤマトにも近いために、蘇我蝦夷・入鹿親子滅亡(乙巳の変)の影響が直截的だったのかもしれない。

本稿では、湯舟坂2号墳の被葬者をめぐって議論されてきた蘇我氏関係者、部民管掌者、丹後王国という3つの要素の整理を試みた。結論として、被葬者の候補に挙げたいのは大私部である。大私部を含む私部は、国家的権力のもとで蘇我系王家のために設定された。当初より既存の国造勢力(海部直氏)と競合関係にあったため、大私部はヒコイマスの子孫⁽²⁾という出自を主張して但馬や因幡とも同盟関係を築いていった。乙巳の変の煽りを受けてか早くに勢力が後退したため、その存在感は史料上希薄であるが、湯舟坂2号墳築造当時は海部直氏と渡り合えるだけの勢力を保持していたものと推定される。

註

(1)『丹後旧事記』(丹後史料叢書)は聞部神社について「神代、聞部の里といふ。故に神号とす。川上麻須郎勸請なり」と伝える。『丹後旧事記』は、『古丹後旧事記』という撰者も成立年代も不明、本文散逸の謎の書物をもとに編纂されたという。成立は近世半ばであるから、同時代性は全くない。神社の勸請者としてみえる「川上麻須郎」にしても、『古事記』にみえる「河上之摩須郎女」を「河上之摩須郎の女(むすめ)」と誤読したために生み出されたものだろう。もちろん正しくは「河上之摩須郎女(いらつめ)」と読む女性の名である。『丹後旧事記』の情報の信憑性は決して高くはない。ただ、「聞部の里」なる地名に『丹後旧事記』が言及している点はやや気かりである。

丹後国熊野郡に私部郷が存在していたことは、近年の木簡出土によって明らかになった。逆にいえば、それまでは忘れ去られていた幻のサトなのである。『丹後旧事記』が成立した近世当時において、私部郷(キサキベノサト)がかつて熊野郡の地に存在したという情報は既に失われていた。にもかかわらず、『丹後旧事記』が聞部の里(キキベノサト)に言及しているということは、少なくともこの所伝が私部郷に附会する目的で後世に作り出された可能性は否定される。何らかの独立した所伝が存在したものであろう。

『和名類聚抄』には熊野郡に属する郷として、田村・佐濃・川上・海部・久美の5郷がみえるが、この5つの地名は全て現在の地名に遺存している。さらに聞部の里の所伝が、かつて私部郷の存在したことを伝えるものであるとすれば、同地は地名の「玉手箱」ともいうべき保存実績をもつということになる。

(2)「国造本紀」によれば、「竹野君」なる一族がヒコイマス同祖関係の結節点となっている。本文でも述べたように、竹野比売はヒコイマスの母に比定される人物の名であるが、他にも2人のタカノヒメが史上に確認できる。1人はミチノウシの娘でヒバスヒメの姉妹にあたり、ヒバスヒメとともに倭王に嫁ぐことになったと伝えられる人物であり、残る1人は8世紀の長屋王邸に住まいしていたと推定される竹野女王で

ある。彼女の食料受取人として「私部老」という人物がみえるのはおそらく偶然であろうが、8世紀の私部史料として留意しておきたい。

参考文献

- 磯野浩光 1987 「古代丹波・丹後の居住氏族について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 角林文雄 1989 「壬生部と私部」『日本古代の政治と経済』吉川弘文館
- 門脇禎二 1986 「丹後王国論序説」『日本海域の古代史』東京大学出版会（初出 1983 年）
- 川尻秋生 2003 「大生部直と印波国造」『古代東国史の基礎的研究』塙書房（初出 2001 年）
- 岸俊男 1966 「光明立后の史的意義」『日本古代政治史研究』塙書房（初出 1957 年）
- 京丹後市史編さん委員会 2012 『京丹後市史資料編 京丹後市の伝承・方言』京丹後市
- 櫛木謙周 2007 「氏族と木簡からみた古代の丹後と丹波」『丹後地域史へのいざない』思文閣出版
- 清水みき 1983 「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 下垣仁志 2023 「大和・河内の前方後円墳群」『シリーズ地域の古代日本 畿内と近国』KADOKAWA
- 鈴木正信 2017 「『海部氏系図』の歴史的背景」『日本古代の氏族と系譜伝承』吉川弘文館
- 告井幸男 2007 「王名と伝領」『古代中世史の探究』法蔵館
- 土田可奈 2003 「私部の設置と意義」『新潟史学』50号
- 豊島直博 2022 「双龍環頭大刀の生産と流通」『古代刀剣と国家形成』同成社
- 吉川真司 1999 「「丹後王国」の残映」『県史 26 京都府の歴史』山川出版社

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2